





讀金花傳技鄙言

東武 百明



風姿を導けハ工ミに建之風情を承せは理をも
 とめて愈私を容るハふ事なかれしかしなが
 ら風姿をつのりハへるハ造物のおのつかうを
 師として私ニ、ろなからしめむと也 見ると
 のハ見るもの、自然聞ものハ聞もの、自然に
 しくハあらし 自然をうるハ無心より出ても
 のに感應するもの也。 我師ハへうし 知造化之

於自然則無言有形言則求而不求是言之自然也
と、風姿風情は人に陰陽のしはらくも離れま
しき自然なる一し。なんそふたつにして好悪
をいひむや、老人風情を殊にとり給ふとい工
夫の至りなるや、しかるに「蓑虫の音を聞に
来よ艸の菴とい子章を漏りし給ふは竊にうた
か所也、僕蕉翁の賛辭を求りて拙き筆を
落すとて「蛙飛込水の音を聞蓑虫の音をきく
と愚意を添ふ。蓑虫むしを謀に聞器になり得た
らハ翁にも譲るまし。しかれとも干今にいた

るまと言行一致なる人さらになし 老人は老
聳深切なりとしきりに頼もしく思ひけるま、
に愚意中入る也
○ものいへハ唇寒し秋の風文選坐右の銘をと
りてせりれ一也 行行鄙夫忘悠悠故難量慎言
節飲食知足勝不祥ニ、をもちおもふ時は翁ハ
滑稽ハいつか見かりたるの大隠士也 滑稽者
流の糸古を事とせんや、然るを唇盡齒寒の説
君の勤もすれハいふにて翁をくたさんや
のほろ一きたよりなき身は二のふとに推を

?

見之談ニほれてかくい申たりけり。
 ○俳諧ハ上手に唾をつくもの也。ハ翁の实情
 ならずといかにもかゝる不覺の談より人を惑
 したる也。又ハいかいに古人なると翁申され
 たるのよし是は翁を賛して人よりいふ辞也。
 何え翁自ら申さる一、不識不知順帝則從心
 所欲不踰矩丘未能一大聖人。一から賛たる事
 當てなし翁におる極な事也。夢付枯
 野をかりまはるかれ野をまはるゆめ心ともせ
 ハヤと其期に向きたる頃す申されしとや

ひろふて世をわたるかなと階級の望とハ引か
 へて先たのむ榎の本もあり夏木たちといふ章
 ニて其志をしられ侍る、僕おもひさためた
 るハ見るものに不圖感したるを私こゝろをす
 ニしもくハへすして言に形し聞えのハ聞て誠
 に歎じたるを思無邪に著しなハ蕉翁に正見な
 る一、た、恬憺虚無にして言も心も風流な
 る事を希ふ得かたしや。さもあらハあれ生涯
 に得て無心をたのしまむとおもふかゝる趣を
 實にかたり逢ふ詞友稀なり。こたひの編集を

○噬齋の章をあらハあけらハた胸中の一
洗感しける

○行春や鳥啼魚の目は涙杜甫か詩をさみて抄
し給ふ実たかふま解かさ人又多し

○あらたうと青葉わか葉の日のひかりと僕こ
とし日光山に詣す翁の章に尽たれハいふ事な

し、あめか下にいま此みゑかりの善きを四月
天青葉わか葉の外ある一さや人はいふにや、

是れ是の心に思ひめぐらしてなすにあらす、
其時の姿を述られていとくると我もはしめて

吁と歎たる也 されはこそ赤人の富士の詠千

歳より二のかた不二と俱に秀て比肩するもの

なし、求たる事すこしなし かく見るもの

、姿をありのまゝにして天地へ響くハありが

たし せめて翁の法樂を解たるを我得意にし

て僕か法樂に代たるハし やしるきは杉に

ほと、さすいはすしもあらねハ愚意をあらは

しぬ

○涼翁が生涯の邪智を悟み給ふ、彼か明題集

とかやいふにこししうれぬ 彼か章に一章も

取へきなきハハカにしかるをおほけなくも蕉
 翁の章をとかめあつハ賛したるも身に負さる
 仕業なり 近頃一筋一音といふもの瓜の蔓と
 ハ子編集を出して涼傘か語をはしめに置いて信
 す 氣のとくなる事ともニ、に序あハハおも
 子事をいふもの瓜 松露庵より年々刊行月次
 集といふの序を僕著刷のうち蕉翁ハ古人を
 看破して骨をなし其世は師を得て骨に至る後
 の人は傲ふにしたハ直きにうみて作に進み荆
 棘に入今やふたハ泥を放下しつ翁のハハに

しへにかへらさるかへりなハ私心なき世に遊
 びて邪路のくるしみを免るハと僕はかくの
 ニとくおもひて生涯学べし
 ○水無月や鯛ハあれとも塩鯨古歌を引て稀し
 給ふか翁にもせよ何はあハと何ハとニとは
 り過たる章ハ取らす 辛崎の松は花より臆に
 このにてもおもひ極めぬ
 ○ひよろ / と摘露けしや女郎花 續古今集
 の哥をもて解し結ぶむ一也 しかしなから 44
 の名に寄て私什はよめるおほし 是た名所は

○山は皆密柑の色の黄になつて といふ是の
 夜の連句をしかも船のうちにて感じたるを翁
 のわか胸を見つけたりと笑ひ申されいと、是
 にとおもふに造化の自然を述たる所翁の胸な
 うずや志かれハ翁の第一ハ造物のおのつから
 也 幸を先にとすゝめたるもむゞせりし
 かるを移り迂りて却て正しく見すして工に
 墮たるハ口惜し造物の見るとのを師といへ
 のハ聞ものを師とするの外なし 就中あり
 のまゝにすかたをいひて言外に餘情のある章

はかたい哉 是ハ私心を以て餘情を謀らむと
 せり工ににて拙し
 ○旅をして見しやうせ世の煤はうひ 翁はま
 ここの嘉嘉也 子³せ世のうせは願難しつれと
 巻をたにみうす たらうせ世の煤はうひといよ
 く 歎したるハ旅寝して見しやう言葉にこも
 りこふたゝひ人に盛感を増しむといふし
 ○訓誥俳諧の文字所々に著し給ふは枝合の兼
 合もや蓬蓬ニ法師が古今抄には昔今とわけ
 と言篇人篇を分明にせり 但ふたつの文字を

おなしく用ひ給ふや

○連句の調へいにしへにかへりて寂たりは

たそここに解しかたき處所ルありかたに箭

を師とするのこ人のおもひ入る處は區別ルあ

らむ強ていひかたし是よりも聲しく連

句のある集を備へまいらするま、沙汰ありし

かし

老人の佳章を愚意に称してたつねぬ

しら山の白いもすてに暮の雲

浮星やきさうき寒く鷗なく

44 ほうくよし原雀鳴にけり

するくと草控舉月江水哉

天川東へなかれしうみりり

かはおその川へ飛入薄かな

風や何にもつかぬ鳥の聲

寒菊や黄なす處を雪の上

荒れ行や正敷冬の梅さきぬ

右丸章僕か一唱三歎する處也なすものほおよ

むをか、なへて算ふにすくなしとやいはむ

か、了老人の章に

つねくはたゝ見る44も雪同外
 古風とて何所やら見よす田植哉
 鳴鹿やおのは悲しまた駈て行
 神送り淨降りし世にも荒にけり
 ふたつ落三つ落風の神しくれ
 右五章は無心の章とはいふ一からす老人に對
 して過当なれとも英敏絶倫といひ守愚が早
 極の詩に前村深雪裡昨夜教枝閑一枝を教枝の
 誤もあれハ也 かの如く申入ハもかならずし
 もあけつらみにはあらずよき老人に相見した

ると抄解を見てお頼に思ひけりま、申達了也
 はた終くに申さハ稱すへき事多かたしけなき
 事すくなかうす得もあらましをいふもの也
 鳥鳴呼カ字盡たのし亦、集團を巻舒してたのむべし
 いさゝか愚章とする一貴評を請もの也
 明しより入相の鐘や春の風
 蚌なく夜やあやしくも閨のの蚤
 翠月雨海、となかれけり。
 西東鳴へき夜也ほとときす
 清水掬ふ午のうら白き日やけ哉

萩原やはるかにたて筑波山

鳴んとさうつやきぬたの音高き

名月や人しつまりて秋の月

達磨もや達広ハ二十八代目

見通一の所なき長き冬の月

けふも降る野中の雪や鴨の聲

おほく記すらうのさくやとはみきぬ
追々之に可申入年

二句

木々の芽や春宮湯次立わか水

談

淡々たる川なまきや半時庵が筆を水に
めつらしとしのすれたのやと思ふまに河

中々に耳はきこえて諫鼓鳥

聞更

老人の速懐もいひつゝ半化いする若き
人も例の暮年上中にうたとやいはむ人の
言葉に又「春雨に哀守氣をばく古江哉とか
いふあり」さういふ水たりや 僕 志す「秋の暮
せんがたさうく耳がなるとせいかいかき人はいさ
おしふに

須之の浦よこ

春の海終日のたり

蕪村

海上の春を 静閑なるありさま 古に
昔人鳥光とみ俳士の言葉に「長き日や同じこと
いと破の波 春こそん 祈す

老木にも二筋三すし 柳哉

柳居

こは青柳や二すし 三筋老木よりこい子
意下也口是「都てたかたす侍ふ人とよ

く糾結（か）し

Blank grid area for writing on the right page.

卷百明老人倚言

越中康工

道不同則相為不議と聖言まのあたりにて同志
の友得るハ周夜に珠のニとし、就中蕉凡を慕
ふ人、其肝膽を探了輩切ニ稀也只老人の高
誼未能知今や却而慚入小仍而儂若也一書中の
得失柳揚の清言誠御惠情不少小、姿情は凡雅
の要なれハ不顧愚老貴各仕小、僕ハ導所老人
のニ卷に卯觀缺仕哉占此存小則布左言小

にも不及見ぬ唐土の事と心と足とせぬに在し
 況や萬物の形孰か是をしろくしや儘あり
 に其理をわすれ唯実情を教へ句も世人の思ふ
 附く所を何となく口号に微妙の同より毒情自
 然とあらはれ来れり人凡の哥ハ情をこれと
 しと氣色ハおのつかり備ふと古来の足踏しハ
 くおろしかり先に毒を附くと考へる人の一句
 此得ましく連俳のわかしハ跋に辨せり
 ○應くといへたとたなくや雪の門各に祢嘆あ
 るを情のなき譽やうとゆなりと答ふ爰を以思

撰百一集の序に去来あへて実情をうつせりと
 述
 ○あらたうと青葉若葉の日の光本文より句意
 を考へハ光山の叢樹泉石に至るまで名にしお
 ふ日の光打きらめくさまを只ならず感して誠
 にたうとくも猶あまり有し下心には御法の
 徳の古一を青葉のか、やくになかり御代の
 惠いの今を以若葉の光りによせ上五文字に
 深く其情を歎復せられしにや
 ○注釈の思召こゝろく思ひくも又面白し

解を深切に請ひ給ふより殊勝の御事にこそ
 ○物いへハ唇寒し秋の風句意を父選に據給ふ
 事ハ詞書にて明白なれハ述に及ましか詞
 左傳に通ふハ奇なる所なると一語を借て射の
 遠ふ物多し
 ○木つ頼む椎の木ハあり夏木た立ちのほるべき
 たよりなき身は木のとに椎をひろふて世を
 見たるかなと階級の望とハ引かえと其志を
 しう水けりる處毛髪為に勤
 ○俳の字の事支考古今抄に俳諧ハ佗流俳諧ハ

蕉門と史記の滑稽を引て定刑せり
 しへの俳諧ハ歌也と宣ふ是古今の俳諧誰なり
 出たるなりむ、尤いみしく故翁の風流にも響
 應せり一生誂の字を用られし事七部集等歴覽
 したまへ又滑稽といふに七取所あれハ何れに
 ても甚しかりましや
 ○俳諧に古人なしの事倚説の通り服す
 ○涼節か生涯の邪智比夫ハ唯愚人を感さすの
 之に止り物の本條を得す俳諧に遊ふちか
 過十に七八ま心理屈に走る躰ハとフ也あハ

片やて片哥連ねて連哥を別に覺へ古へ連哥
 と改りしより片歌と二遂不出西行上人撰集抄
 新古今の和歌を片きて連哥と宣ふ涼命いと
 ほし草に葛葉の和哥を片やて片哥といふに原
 し一義なれは自然と如此且七文字を昔に遣り
 一口調も変ると覺へしとや「子を思ふ起りに
 成けり夏望、き、し是は俳諧の心也ほ句也彼
 か片哥といふに準ずる句に

熊野踏を我之末水ハ早蕨生しおろ滝畔尾つの中
 中に蟬の時雨れ命かきり命存鶉啼とこなきけ岩と
 一重るこのうへに鴉ある

北風節夏風に多し 皆是詠諧の句又とハし
 物也と張儀か辨を存せり 俳諧の連歌と書しハ
 古人歌仙存と 侘す時詠諧の連子哥といふ事を
 前に記し山の也 故に詠句はかりにハ不書連
 哥より出たると云に詠すさあうハ連歌俳諧
 と書し
 ○北海古風を 侘ふ人多しんか中に唯安くと
 する事とて 徒言をよしと覺るもありあるハ句
 をへちむと やすめ字をちりほめわざと文字を

あはすも有はた高上に行過り
 の風流しぬるき様子におもひ口を利仙士が存ら
 ず爰に止りおぬのれひとり自得すといへるは他
 の人に通せず是等の人く事を偏に墮すれハ
 軒只一手に出るなり翁三百餘軒と聞せるハ
 不易流行爰風自在にして飯あふく囃か馳走
 や「菖風馬の尿つく」秋海棠西風のいろを
 鬼灯は実も葉も赤も粗一針を箱のニき賃とモ
 何に高上の論ありや又本在し一物もなり小ハ是
 等に御おし事を謙り世に有藥物の其まゝにし

たかひ句を実情に述るを翁の胸を知る人とや
 いはお翁は行かゝり好くも悪くも心
 をとゝめす言繪給ふ李杜に晩唐の詩多しと也
 故に大家と稱する事古人の論者よき句はあり
 存小ハ翁も取られずさ小ハ真の細道に二句
 前の作より悪く作り変へて出されたり、前
 章ハ愚撰後拾遺に載せり行脚なとにはよき句
 はありりせぬものと承りしかむへ也り、
 〇水無月や鯛はあれと塩鯨翁子もせよ何は
 あれと北何ハとことほり過たる章は取らすと

餘らすやかて染るといふ晒といろへり其時を

見るにたし山に月の照て飛る事ならずや

名月や池をめぐりて夜もすから

姿にて聞ハ徒言ともしいはむ言外に種々の物眼

中に見えて情の長き事ハ筆舌に用て説事かた

し

後の月葉落て四百八十寺

希因

乙申師の長にて世に鳴る句也、然共彼格を定

るとは是等ならずや後の月の頃ハ葉のちりす

き南畑[?]棟くあらはるゝと時節に算用合せて

作小リ

よしのにて

山さくら瓦葺の走ふたつ

花ハちりすき瓦屋根のあらはるゝなえ不新に

只何となく葬のるゝより薨のほのかに見え

とある眼前其終に連足^ッの一字行着すしてよ

しの床敷さま情あるものならずや以極り世人

尋常と危侍^ル後の月は秀逸と鳴^ハにくらへハ

~~勢~~勢^如斯^如されは萬物を実情にうつさるゝにて易^キ

も巧^キも其俣なれハ悪しくと云句も筆持てハ

哀指す事ありさるはな一惜哉老人の鍛練早く
海を舟に建る改教を切給一

○御風流古調を訊ひ給ふ殊に床敷に存小聯句

僅か遊所は前調ハ二句の了の竹やう一句の

作りやう二三舞四五舞なう二ハなし俗俳の見

識あり各の目春の日を熟覽するに一句の作

やうの呈付やうの穀数旅無寝の感あり各の日

尤奇え續句短十を一字下りて書事ハ翁の減後

枯尾花に始る小賢十形ありてやすらかなうす

七部集 猿蓑 炭俵 各の日春の日
あり聖 ひとこ 深川 集 のこくとく言下なく

一 整に書度事にて候

○ 老人の佳章思耳に

明しより入相の鐘や春の風

五月雨海へくと流 水 けり

西東晴啼一サ夜又何と、ます

宮たちわしるさハ杉に何と、ます

萩原やはるかにたこ了筑波山

秋の暮七人かたもなく耳か鳴

右 古意下 感詠不浅

愚句自證するに似た小と老人無心の章とは

おへからすと志うせらより金花傳の中佐の念の
いへるを書留く念に調不台の瘡結ふ一と
より世上の評を請ふ所れハ蒼了識る心と
おろす

お常事 一はた、之のゆりきり哉

祢す人あり老人の取玉梅に東武の雪
なすおにりて毎に叶有北五は五ヶ月雪に埋て
ニ三月にはよりほのかに足印了所珍しあんと

梅 か香や又松風の面白し

すのふあすするとき嵐の章梅か香に陽気
起し又松風のいよく打つて面白し聞之時と
いふ人あり

曙の爰ハ 不明 處よ未開紅

宇治殿梅とさくらの上へ下を論し結み公任御恐れ
なす所から春の曙曙の紅梅の為人なる色も捨れた

からんと豈ふとせさ休ハ曙のこハとおも所
にほ、笑いたる未開紅一入と所ある人といふ人あり

灯 しふとつまた夕息の足えにけり

黄昏すくる窓に火の灯れ一頃またまた薄く
白く足ゆる風情幽静なり一言外に之もいへぬ味
ありといふ人あり

誰 住て遠山北との蚊遣哉

古哥に撮遠山北との人家蚊やりにあらハる
を誰住てと折詠す夕暮の情涼しといふ人あり
啼 席やお乃ハ悲しまた駈て行

鹿はヒトとあハ小に鳴すて、ゆ飛子とせその
遊る強きを足て扱ハ悲しきハ鹿かさせるに
あらし我心をもてこゝろをいためると自問自答あ
りといふ人あり

しほらしや年寄^寄通^通はつしくれ

はつしくれに通うせしものよくしこまことにしほらしと
いふ人あり

川瀬の川へ飛こむ 昔薄かな

は句中へ次也不似合と申 越人あり僅よき
句はあり日々ぬもの 逸事に 埒明運く 史助け
給ふ 老人の耳高しとやいかむ

其外之句も 夏にて 鳴いかにこにて不取

かしこもてはやせしをこゝにてうと云古

人の説に人くの好こ面のかはりし如く

とむなり

中くは耳の間えこかんこ鳥

南更

うき、我を淋しかうせよとあはれとせれとい
引かへ耳が聞えこか、さむき事を聞いつ
と耳がきこへすはよかんと云えか

春雨に宮守 氣を吐く古江哉

氣を吐とす 古江 晴付 三重あり 雨は
古江やとす 晴飛 込と新うき物を置合せ
城跡や古井のとす 清水まつ 洞人と 死法せり

老木にもニ筋三すし 柳哉

柳居

他の集の謡をよこ 謡小り

永き日や同一事して 磯の波

馬芝

おなじ事して 磯の波と 置五しに 永き日の
洞と 格と 定の 断る 事 蓮風には 遠いと いらむ
行年やおなじ事して 水車 希因 是等

ハ
理
崖
あ
ら
す
る
に
や

